武士の居住地分類（藩）別にみた農家住宅と 武士住宅の関連性

江戸時代後期における旧藩独自の農家住宅平面構成の
成立要因に関する実証的研究

正 会 員 大 岡 敏 昭*
正 会 員 青 木 正 夫**

序文

江戸時代後期に建てられた農家住宅は、旧藩領域によってその平面構成（発展系統）が異なっていること、同じ系統の住宅でも、その藩独自で独特の形式の住宅が成立分布していることを筆者らの研究で明らかにした¹⁾。このことは、農家住宅平面構成の地域的相違を規定する地域的条件は、地形、気候、風土などの自然・地理的条件ではなく、藩の枠組みにおける人的・文化的条件であったといえる。この実証藩域は、東北、中部、北陸、近畿、九州に位置する 27 の藩に及び、一つの普遍的現象であったことを示している。

では何故に各藩独自の農家住宅平面構成が成立し、隣接する他藩の住宅とは藩領境界で平面構成が異なっていたのであろうか。それに、その相違を規定している藩の人的・文化的条件とは具体的にどのような内容であるのか。これは住宅と地域との歴史的諸関係の問題に止まらず、農家住宅平面構成を形成し、規定する力は何かという意味において現代と今後の住宅の展望にもかかわる重要な課題である。

藩領域で住宅が異なっている事実は、元々農家住宅の源流を辿れば「タテ穴住居」のような単室住宅と考えられることから、その後の室数規模の拡大に伴う平面構成の発展過程が、各藩領域で異なった様相を展開した結果にはほかならないといえる。農家住宅の発展はとくに江戸時代中・後期が顕著である。それは、農村への商品経済の急激な浸透、農民層の分解が進行する社会変化のなかで、本百姓農家の室数・規模が急激に拡大し、室内意匠などが充実化している²⁾。この住宅の発展期に藩の人的・文化的な条件が作用したと考えられるのである。幕藩体制における藩の農民支配の基本的課題は、江戸時代の石高制経済に規定された米中心の貢租収納であったことは論を待たない。したがって、その年貢の未進をなく

し増大を図るために、江戸期をとおして藩内の実状に対応した農民に対するさまざまな生活規制、奨励等の諸政策が展開されたといえよう。一方、農民側にとってみれば、只搾取されるがままの生活ではなく、貢租収納と夫役を前提とした藩の枠組みに規制されながらも、小農本百姓の自立と成長、および年貢の村請制、村落共同体に基づく村の自治権がかなり強く存在したといわれる³⁾。藩独自で独特の住宅形式の成立は、大きくみればこのような藩の枠組みの中における外からの作用と内からの志向発展により、藩の文化の総体として現象したものといえる。これを具体的に仮説すれば、外的なものとしては武士住宅の影響、家作規制、農業諸政策、大工の仕事形態など、内的なものとしては農家経済力、営農形態、伝承慣習行事（生活慣習）、分家の創出（同質平面の志向）、村の階級構成と上層階級への住宅志向等が考えられよう。そして、その外的、内的な規定構造は藩によってさまざまであったと思われる。

本研究は以上の認識から藩独自の農家住宅平面構成の成立要因を解明していくことを目的としているが、本稿では、武士住宅と農家住宅との関連性を、以下にみる武士の居住地分類による藩別に家作規制を含めて考察するものである。

1. 武士の居住地の分類

武士は元々農民と同じく在郷に居住していたが、江戸時代初頭に城下に集住せしめられ都市生活者化している。したがって当初の住宅は農家とはほとんど変わらないものであったといわれる⁴⁾。しかし、元禄期までには城下町の整備に伴って座敷などの接客空間がかなり整備され、藩独自の武士住宅の形式が成立してくる。これに対して、農家において座敷空間が取り入れられるのは、上層農家の一部では江戸初・中期であり、本百姓農家で座敷が一般化するのには、藩によっても異なるが江戸時代中・後期であろう。この時期の本百姓の農家住宅の発展は、寝所、茶の間などの家族生活空間の拡大発展とともに、とくに座敷などの接客空間の拡大発展が顕著であり、

* 日本文理大学 助教授

** 九州大学 教授・工博

(昭和 62 年 3 月 9 日原稿受理)

住宅の典型規模といえる。他の藩の規模分布もおおむね20～40坪台に多く分布しているが、その分布の幅と中心は藩によって異なっている。武士住宅と農家住宅の規模との関係を見ると、盛岡、米沢、松本藩では農家住宅の方が規模が大きく、岡、佐伯、人吉藩では逆に武士住宅の方が規模が大きい。その他の藩では両者の住宅は同じ規模の傾向にある。したがって、これも藩によって異なっているといえよう。

次に武士住宅の座敷構成である(表—3)。武士住宅の平面は方位とは余り関係がみられず、むしろ接客を考慮して正面玄関(客入口)との位置関係が重視されている。この正面玄関と座敷の位置関係においては、座敷が正面玄関側にある「正面型」が圧倒的に多い。正面玄関と反対側に座敷のある「対向型」は盛岡藩に極くわずかみられ、他は三春、臼杵藩に分布しているに過ぎない。階層との関係はみられず、城下町の屋敷地条件に規定された結果かもしれない。座敷構成における次の間の有無については規模との関係もあって、やはり階層との相関関係がみられる。すなわち、盛岡藩において、次の間の無い住宅は下級武士(扶持・50石未満)の57%に及ぶが、中級武士(50石以上)になるとその割合は35%に下がる。そして上級武士(300石以上)ではわずか4%しかない。他の藩においても次の間の無い住宅は下級武士に多い傾向にある。次の間の有る住宅は正面玄関を基軸にして表—3にみるように前ヨコ型、前タテ型、鍵タテ型の3つの座敷構成に分類されるが、盛岡藩ではタテ、ヨコの2つの型に分かれている。また米沢、相馬、松本、臼杵藩もこれと同様な傾向にある。一方、上山、諏訪、岡、佐伯藩では1つの型にまとまる傾向にある。座敷構成は藩によって多様な型を有する藩と1つの型にまとまっている藩に分かれている。

3. 武士の居住地分類による藩別にみた農家住宅と武士住宅の関連(家作規制も含めて)

(I) 藩の在郷居住政策により多くの武士が在郷に居住している藩について

(1) 人吉藩

人吉藩主の相良氏は建久四年(1193)以降、戦国大名、近世大名としてこの領域を支配し続けた旧族居付の外様大名である。人吉藩の在郷に居住する武士は小知徒士以上の正式な家臣であり、在郷では「御家士」と称されている¹⁰⁾。一方「郷士」または「郷侍」と称される階層も在郷にかなり多く居住しているが¹¹⁾、これは正式な家臣ではなく農民などから身分の格上げされた所謂「登用郷士」である。郷士は軽輩、足軽ともいわれ実際の身分と生活は百姓同然である。苗字、帯刀、傘、足袋などが特別に許可され、村方三役勤めが可能な上層農民といえる¹²⁾。この「御家士」と「郷士」は在郷において「郷侍並百姓、御家士に対し、御失礼なく、士と見掛候て、傘・頭巾・

表—4 武士の居住地の変化
(人吉藩)

居住地	史料	分限区 天保元年(1830)			分限区内 文久2年(1863)		
		知行取	扶持取	計	知行取	扶持取	計
城下町		152	147	299	122	70	192
庄口(33ヶ村)		29	238	267	64	336	400
その内14の村		(29)	(105)	(135)	(30)	(120)	(150)
計		181	385	566	186	406	592

(注) 史料は多良木町史に所収

(口数：庄口)

表—5 武士住宅の建築年代
(人吉藩)

建築年代	天保	弘化	安政	文久	元治	明治	不明	計
戸数	3	3	1	16	5	4	6	29

(注) 建築年代は「西南の役家臣居付」に記載されている年次である。

手拭等かぶり候ハ取之、又ハ下駄・木履をはき候節ハこれを脱ぎ、片寄礼儀を整へ罷通べし。」諸藩法令(文化四年)¹²⁾とあるように身分的差異は明確であった。

藩の正式な家臣である「御家士」は在郷にあっては藩の所役人を勤め、その合間に手作地を耕作していたのであるが¹³⁾、江戸後期の天保元年(1830)には全家臣566人の半数近くの267人が在郷に居住している(表—4)。そのうち防備を目的とした14の外城以外の一般の村落に居住する家臣も半数いる。その階層は下級の扶持取り層がほとんどである。文久二年(1863)になると、在郷に居住する家臣は400人にも増加し、全家臣の7割近くにも達する。わずか30数年のうちに在郷に居住する家臣の数は1.5倍に激増しているのである。階層も知行取り層が増え、外城以外の村落にも居住が進み、一村当たりの家臣の平均居住人数は12人にも及んでいる。一方、その逆に、この時期に城下町の家臣の人数は6割に激減しているのである。これは人吉藩は旧族居付の大名故に近世以前から在郷家臣が多く存在しており、しかも領域の南北を熊本と鹿児島の大藩に挟まれた2万石の小藩故の軍事的防衛などの理由から、近世になっても在郷に家臣が多く居住し続けたが、とくに江戸時代中・後期にかけては、農業振興と家臣の生活維持のために城下町に居住していた家臣の在郷への移住が急速に進んだ結果と考えられる。

人吉藩の武士住宅は明治九、十年の西南の役によって城下町のすべてと在郷の多くが焼失している。幸いにも明治十二年に熊本県全体を対象に作成された「西南の役家屋焼失調」¹⁴⁾が保存されているので、この史料から武士住宅を考察する。史料は焼失した家屋の所有者の届け出張の形式で簡単な平面図、身分、建築年、建物坪数などが記載されている。史料には村の士族3名の証明があり記載内容の信憑性は高いと思われる。この史料のうち人吉藩の領域に該当する球磨郡編の士族と明記されている67戸について考察していく。建築年代は表—5にみるように江戸末期から明治初期(一～八年)である。なかでも文久年間が多い。

武士住宅の考察の前に、人吉藩に支配的に分布する併列鉤屋型の農家住宅の典型を事例—1, 2に示している。この型は前稿(その3)で論じたように、併列型から独立寝所の増設、座敷の拡大によって主屋の棟が鉤型に伸びて発展した住宅型であった¹⁵⁾。武士住宅の平面を分類

すると農家住宅と同じ併列型と併列鉤屋型が8割強を占める(表—6)。そして2つの型は在郷ばかりではなく城下町にも分布がみられ、城下町武士住宅—在郷武士住宅—農家住宅の3つが同じ型である。農家住宅と異なる点の一つとしては、カマドのある土間の「炊所」が主屋とは別棟にある別棟型がみられる。これを表—7において規模、住宅型との関係でみると、15坪台以下の小規模でかつ併列型の住宅には別棟型は無くすべて同棟型である。30~40坪台になると別棟型が多くなるが、60坪以上の大規模住宅になると再び同棟型のみとなっている。小規模住宅において同棟であり、中規模で別棟になっていることに限って考えると規模拡大に伴う炊所の分化過程ともいえるが、何故大規模になるとまた同棟になるのかについては現在のところ不明である。炊所の別棟化の理由は、別棟炊所のある住宅が在郷よりも城下町の武士住宅に多く(16戸のうち11戸が城下町の住宅)、農家住宅にはそれが全くみられないことと併せみて都市における防火も一つの要因と考えられる。

次に平面事例から検討してみる。まず城下町の武士住宅である。事例—3は梁行き2間半、桁行き5間半の2室併列型である。左側の四坪の部屋は座敷であり、その表の幅1間の下屋は玄関であろう。右側の四坪の部屋は家族の日常的居場所の茶の間であり、その右手は炊所である。農家住宅の併列型にみる部屋の配置と同じである。事例—4はこの併列型から発展したとみられる併列鉤屋型である。梁行き2間半は事例—3の併列型と変わらず、桁行きが鉤型にながく伸びている。在郷の武士住宅が事例—5~7である。事例—5は併列型の梁行き2間半、桁行き7間半の住宅である。右手の五坪の部屋は座敷であり、表には玄関が設けられている。中央の部屋は台所であり、そこが家族の食事場であろう。その左手は恐らく土間の炊所と思われる。独立の寝所はみられない。このような併列型から独立の寝所が増設されて棟が鉤型に伸びて事例—6にみる併列型鉤屋型が成立している。伸びた鉤屋の部分は台所と炊所である。この住宅は事例—2でみた農家住宅の平面構成とまったく同じである。事例—7は鉤型の棟が表側(炊所、台所)だけでなく裏側にも独立寝所の納殿が継ぎ足す形で伸びた併列鉤屋型である。武士住宅はこのようなL型の鉤屋型もみられ、とくに城下町に多い傾向にある。農家住宅でこのような住宅は庄屋の一部にみられるだけでほとんどの住宅は鉤型の棟が表側に伸びたL字型の棟構成に定形化している。

以上、2.5間程度の梁行き寸法、部屋の配置、平面構成だけでなく、併列型から併列鉤屋型への発展過程においても城下町、在郷の武士住宅と農家住宅との3者の住宅の間には強い類似性がみられるのである。

家作の具体的な規制が出されるのは江戸後期である。城下町と在郷の下級武士に対しては「小知徒士通、家作三

事例—1

事例—3

事例—5

事例—6

事例—2

事例—4

事例—7

表—6 居住地別にみた住宅型 (人吉藩)

居住地	併列型	併列鉤屋型	その他	計
城下町	4	20	7	31
在郷	5	23	8	36
計	9	43	15	67

(単位: 戸数)

表—7 棟形式と住宅型、規模 (人吉藩)

棟形式(②)	住宅型	併列型	併列鉤屋型	その他	住宅規模(坪)	15坪以下	15坪以上	30坪以上	60坪以上	計
居宅(炊所)	12	4	1	6	8	1	15			15
居宅(炊所)	9	31	11	6	1	9	18	4	9	51

② 棟形式は「居宅」・「炊所」は主屋の居宅と炊所が別棟である住宅(居宅・炊所)は居宅と炊所が一つの土間にある住宅

間梁以上、白灰附壁の事。」禁令(文化四年)¹⁶⁾。とあり、郷士と百姓に対しては「足軽、百姓、又もの、家作、五疊敷以下分限に应じ、鋪物等に至迄、不目立様質素にいたし、斧立の祝ひ亦是随分軽可致事。附百姓ハ掘立家の定法に候得共…略」所郷法令(文化四年)¹⁷⁾とある。下級の武士住宅に対しては梁間3間以上が禁じられ、郷士と農家は五疊敷以下(梁

府藩との境界域に集中的に分布している。以上、諏訪藩に分布する3つの農家住宅は発展過程が異なるものの、その系統は前座敷系である。

まず本棟造りの農家住宅と武士住宅の関係である。事例—23は諏訪藩城下町の170石の中級武士の住宅である。文化十一年(1814)に作成された絵図による平面であるが、建築年はそれよりかなり古いと伝えられる。住宅の表側の座敷構成は横トコの座敷と次の間(ヒロマ)で構成された前ヨコ型である。次の間の表にはその部屋の幅いっぱい2間に奥行き1間の立派な式台玄関が設けられている。次の間の奥は家族の日常的居場所の茶の間であり、広さは約16畳とかなり広い。同じ茶の間でも、土間の部分を板間にして広い茶の間を設けた武士住宅は米沢藩などに見られたが、土間とは別に最初から広い茶の間を確保している平面は諏訪藩武士住宅の特徴といえる。茶の間の奥は主人の居間が設けられている。敷地の間口が6間程しかなく座敷と次の間の接客空間を表に優先するため土間が奥にずれた平面になっている。この平面形態からみて屋根形式は妻入り形式であろう。事例—24は同じく100石の中級武士の現存している住宅である。横トコの前座敷と立派な式台玄関のついた次の間との構成は前事例とまったく同じである。敷地間口が9間と広いゆえに住宅の間口も拡大し、次の間の横に土間がとられ、整形の田の字型的平面構成になっている。次の間(ゲンカンノマ)と土間の間は壁で仕切られており、次の間は玄関の間としての純然たる接客空間である。次の間の奥は18畳の広い茶の間(カッテ)が設けられ、その奥の2室が中トコのある主人の居間である。平面構成全体においても前事例と同じである。事例—25も70石の中級武士の住宅であるが、平面構成は前の2つの住宅とまったく同じである。このように城下町の中級武士の3つの住宅は平面がまったく同じであり、諏訪藩独自の平面構成原理が貫かれている。この構成原理は先にみた事例—21の本棟造りの農家住宅の平面構成原理と極めて強い類似性をみるのである。さらに屋根形式と正面外観においてもいえる。事例—24、25の住宅の屋根は緩やかなこう配の切妻板葺の妻入りである。また庇のついた式台玄関を中心とした正面外観は特徴的な形態である⁴⁶⁾。事例—23もその平面からして同じ形式であったと思われる。この特徴的な屋根と正面外観も事例—21の本棟造りの農家住宅とはほとんど同じ形式である。

以上の武士住宅は江戸後期の建築と考えられるが、では江戸初・中期についてはどうであったか。この時期の武士住宅は現存せず、平面史料もない。したがって、その当時出された家作規制から推察する。諏訪藩の城下町武士住宅の特徴的形式である玄関構えについては、寛文八年(1668)に「…一、玄関構停止。但し、家作之時節、以「差図」免許可^レ為「制外」之事。」家作の覚書⁴⁷⁾とある。すで

に江戸初期の寛文期に武士住宅の玄関構えが成立していたことが分かる。この玄関構えとは先にみた武士住宅の次の間の表に設けられた式台玄関を意味するものではないかと思われる。玄関に関する規制は元禄八年(1695)の規制にもみられ「一、玄関構の儀給人者応「分限」、輕舗理可^レ申事、附給米取玄関かまいハ家老中まで可^レ受「指図」事…略」(家中法度条)⁴⁸⁾とある。このように玄関構えの形式は諏訪藩の江戸初期の武士住宅家作規制の主要な対象であり、当時その形式が成立、発展していたことをうかがわせるのである。

また諏訪藩の武士住宅の特徴の一つに広い茶の間があることはすでに述べた。これは上記の家作規制の中に「一、家作の儀、(略)身分相応輕可^レ仕、但台所は少広^茂格別之事、(略)」とあるように、台所は少々広くてよいとの内容が明記されている。この台所とは上にみた茶の間を意味するものと思われ、諏訪藩の武士住宅の茶の間が広いのはその影響といえよう。しかもこの広い台所(茶の間)は武士住宅だけでなく本棟造りの平面の特徴の1つでもあったのである。

本棟造りの農家住宅が分布する諏訪藩の東五千石地域は元和三年(1617)に諏訪藩に新しく加増された地域である。そのうち二千石を明暦三年(1657)に諏訪氏の二弟に分知し、あとの三千石は藩の蔵入り地である。ともに代官を通しての藩の直接支配が当初から行われ、諏訪盆地の領域が江戸中期まで地方知行が残存したのとは異なっている。代官は時代によって必要の都度城下から出張し、名主家に宿泊してその任に当たっている⁴⁹⁾。代官、在郷武士の住宅は現存していないので、城下町武士と農家との間に位置する階層として、江戸初期からこの地に居る名主の住宅をみる。この住宅が事例—26である。17世紀末(江戸中期前半)の建築といわれ現存する住宅では長野県最古である。当初は土間に面した表と奥の2室であったが、18世紀末(江戸中期後半)に上手の表と奥の2室を増築し、座敷、式台構えを整えている。寛政七年(1795)に諏訪藩主の東五千石地域の巡見の際の家臣の宿泊所となっている。屋根は茅葺きの寄棟であるが、平面は明らかに前述した本棟造りの3点の特徴がみられる。事例—21の本棟造りの前段階の住宅とも見做せよう。しかもこの平面は諏訪藩城下町の武士住宅の表側半分の特徴的空間様式とも強い類似性がみられるのである。

本棟造りの農家住宅は、これまで松本平の南部地域の特徴的な農家住宅形式として認識されてきた。しかし、以上にみた諏訪藩の城下町武士住宅の平面と屋根、外観との強い類似性がみられた事実から以下の仮説が想定される。本棟造りは、諏訪藩の江戸初・中期にかけて発展した城下町武士住宅の特徴的な空間様式が東五千石地域の代官、名主の上層階級の住宅形式として継承発展し、

住宅№1 (江戸中期) 前座敷田の字型
諏訪藩 (長野県塩田市北蔵井) 直文
階層 (名主)
諏訪地方藩・農家住宅

事例—26

諏訪藩武士住宅 (在郷) 住宅№45
前ヨコ型 (江戸後期)
長野県塩田市北蔵井
(石森不明)

事例—27

階層関係からして考え難いことからそのことがいえる。

ところで、城下町のある諏訪盆地には本棟造りは全く分布していない。この地域の農家住宅は庄屋層、本百姓層ともに屋根は茅葺きで小規模の質素な住宅である。これは、松本平の東五千石地域に比べて農業生産力が低いこと、中下級の武士がかなり多く在郷に居住していること、また江戸初・中期には東五千石地域の方が諏訪盆地に比べて名子の自立が遅れ上層の御館農家が多く存在しており⁵⁰⁾、一方諏訪盆地は名子の自立が早く進み、階層が平準化し高い経済力を有する農家が少ないこと等に起因していると考えられる。では諏訪盆地に分布する農家住宅と武士住宅との関連はどうか。この地域の農家住宅の特徴である小規模座敷の「中トコ」は、すでにみた城下町武士住宅の奥に位置する主人の居間の「中トコ」と同じ形式である。武士住宅におけるこのような「中トコ」は他の藩においては極一部にみられるに過ぎないが、諏訪藩では居間のトコ形式として普及していたことがうかがえる (事例—24, 25 に明記)。次に事例—27 は諏訪盆地の在郷武士の住宅である。城下町の武士住宅と平面的に類似しているが、特徴的な式台玄関はなく屋根も茅葺きの寄棟直家であり、その簡略型といえる。また農家住宅とは茶の間の位置が異なるが前座敷構成に共通性がみられる。農家に対して出された家作規制は武士を対象とした規制より遅く、江戸中期後半の天明七年 (1787) に「被仰出書」⁵¹⁾が出されているが、それは天井、板敷が禁止されているだけで、他は分相応をもとめた儉約令に近い内容である。

(2) 盛岡藩

盛岡藩主の南部氏は旧族居付の外様大名である。江戸初期の藩内の統治は、郡山、花巻、花輪、八戸、七戸、

三戸、遠野などに城館を置き1千石以上の家臣 (大身者) 22 家に陪臣を扶養させて統治していた⁵²⁾。その後地方知行の廃止にともない寛永四年 (1627) の花巻城の廃止、寛文七年 (1667) の郡山城の廃止などによって、家臣の盛岡城下への集住化が進められている。しかし遠野の分知⁵³⁾を含めて実際にはかなり多くの家臣と陪臣が幕末まで在郷に居住し続けている。

盛岡藩に支配的に分布する農家住宅は事例—28, 29 にみるように曲り家の鍵座敷系住宅であった⁵⁴⁾。同じ鍵座敷系が分布している米沢藩の住宅とは曲り家の構成など平面の細部が異なっている。それに、広間 (ジョウイ) の位置が、住宅の表側にある事例—28 の住宅ばかりではなく、遠野地域を中心とした仙台藩との境界地域に限って、事例—29 にみるように広間 (ジョウイ) が住宅の奥側に位置する住宅がみられる。盛岡藩の城下町武士住宅の平面は表—3 でみたように多様であった。事例—30 は城下町 100 石取りの中級武士の鍵座敷系住宅である。事例—31 は 68 石取りの中級武士の住宅であり、この住宅もタテ型座敷を持つ鍵座敷系住宅である。以上の 2 例の住宅は事例—28 にみた広間 (ジョウイ) が表側に位置する農家住宅の鍵座敷広間型と同じ形式である。このタテ型座敷を有する武士住宅は 2 割弱を占めるに過ぎず、ほかは事例—32 にみる平トコの座敷一室型、あるいはヨコ型座敷が多い。したがって盛岡藩の農家住宅は多様な城下町武士住宅のうちの 1 つの平面形式と関連があるといえる。

次に盛岡藩南部の遠野地域を分知している遠野南部氏の陪臣住宅が事例—33 である。遠野南部氏の陪臣は盛岡本藩の直臣と同じ家格意識があったといわれる⁵⁵⁾。また住宅の立地場所は遠野城 (要害) 近郊の農村地域であり、在郷武士の範疇にいて差し支えないと思われる。鍵座敷系住宅であるが、家族の日常的居場所の広間 (ジョウイ) は住宅の奥側に位置し、玄関の間、日常的な接客の場であるチャノマが表側に配置され、接客構えの強い平面である。この付近に分布する農家住宅もこのような広間 (ジョウイ) が住宅の奥に位置する平面構成であり、武士住宅との関連がうかがえる。

盛岡藩の家作規制は農家に対して、分相応にせよといった儉約令ごときのもので住宅の規模・形態を規制する内容ではない。

(Ⅲ) 農民などからの登用郷士がいるものの在郷に武士はほとんど居住していない藩について

農民などからの登用郷士は存在するものの、城下集住政策により正式な家臣は江戸初期から幕末まで在郷にほとんど居住していない藩 (上山、三春、岡、白杵、佐伯、松本藩) について考察する。これまでにみた在郷に武士がかなり居住していた藩の大名が、米沢藩を除いてすべてが旧族居付であったのに対して、この藩はすべて江戸

住宅地18 (江戸後期Ⅱ) 前座敷広間型
盛岡藩 (岩手県川井村小国)
附居 (本百姓)

事例—28

住宅地23 (明治前期) 前座敷ヨコ合い型
盛岡藩 (岩手県盛岡市上野馬牛)
附居 (本百姓)

事例—29

盛岡藩武士住宅 (江戸中)
口タテ型 (前座敷広間型)
(100石)
(「盛岡藩武士住宅」文化3年より)

事例—30

盛岡藩武士住宅 (江戸中)
口タテ型 (前座敷広間型)
(68石)
(「盛岡藩武士住宅」文化3年より)

事例—31

盛岡藩武士住宅 (江戸中)
前一家型
(2人扶持)
(「盛岡藩武士住宅」文化3年より)

事例—32

盛岡藩 (盛岡藩前部) 武士住宅 (右部)
口タテ型
盛岡藩近郊村 (盛岡市)
(佐田氏「盛岡の曲り家」より)

事例—33

初期以降に新たな領地に入封した転封大名である。

まず上山藩である。江戸初・中期の譜代、天領拡大政策と東北の外様藩の目付けの意図をもって多くの譜代を入れ換わり配置している。最も長い統治は江戸中期(元禄十年)に備中より入封した松平氏で幕末まで統治している⁵⁶⁾。上山藩の農家住宅は事例—34にみるように前座敷系住宅であり、隣接する米沢藩の鍵座敷系住宅とはその平面構成が異なっている⁵⁷⁾。事例—35は上山藩の大目付けの武士住宅である。座敷が曲り家となって表側に突き出した特異な平面である。その座敷には玄関の間と式台玄関がつき、座敷の奥の部屋は主人の居間を兼ねた次の間である。この住宅の並びに建っている武士住宅が事例—36である。座敷と奥の部屋の間には小部屋が設けられ、玄関の間も次の間のように拡大している。前事例に比べて接客と家族生活領域をより明確に区分した発展型といえる。これらの住宅地の並びに建つ他の3例の調査住宅の平面もこれらの平面と同じである(表—13)。以上の平面形式は上山藩の中級武士住宅の特徴的形式といえる。しかし農家住宅との関連性はない。ところが事例—37にみる下級武士(足軽)の住宅は前座敷広間型であり農家住宅とはあまり変わらない。城下町居住でも下級武士は棒碓だけで生活はできず、実際は半農生活であったといわれる。したがって江戸中期の上山城下への入封時に下級家臣はその地域の農家と変わらない住宅を建て、中級以上の家臣は接客を重視したその藩独自の平面を発展させたと推察される。

次に三春藩である。藩主の秋田氏は江戸初期の正保二年(1645)に常陸の国から入封し幕末まで統治している。三春藩の農家住宅は事例—38の前座敷広間型と事例—39の鍵座敷広間型の2つの異なる系統の住宅が混在分布している。事例—40は200石の中級の武士住宅である。妻入りであり、タテ方向に土間玄関—玄関の間—座敷と繋がる構成である。このような平面形式は現存する他の住宅(表—13のNo.44)にもみられ、三春藩の中

住宅地36 (江戸中期Ⅱ) 前座敷広間型
上山藩 (山形県上山市大目付)
附居 (本百姓)

事例—34

上山藩武士住宅 (江戸中) 住宅地33
前一家型 (前座敷広間型)
山形県上山市大目付

事例—35

上山藩武士住宅 (江戸中) 住宅地32
前一家型 (江戸後期)
山形県上山市大目付
(50石)

事例—36

上山藩武士住宅 (江戸中) 住宅地36
前一家型 (前座敷広間型)
山形県上山市大目付
(50石)

事例—37

住宅No.116 (江戸中期Ⅱ) 前座敷広間型
三春藩 (福島県三春町松平)
陸層 (本百姓)
三春藩・農家住宅

事例—38

住宅No.136 (江戸後期Ⅱ) 鍵座敷広間型
三春藩 (福島県本郷町山根)
陸層 (本百姓)
三春藩・農家住宅

事例—39

級武士の住宅の特徴的平面形式といえる。この武士住宅と農家住宅との関連性はない。

以上は東北の藩であるが、九州の小地域に隣接する岡、臼杵、佐伯の3藩をみている。この3藩の地域は近世以前までは大友氏の1つの領域であったが、江戸初期に3つの外様藩（岡藩は中川氏、臼杵藩が稲葉氏、佐伯藩が毛利氏）に分割され幕末に至っている。各藩に支配的に分布している農家住宅は、岡藩が事例—41の前座敷田の字型（平トコ）、臼杵藩が事例—42の鍵座敷広間型、佐伯藩が事例—43の前座敷田の字型（妻トコ）であり、その平面構成は3藩で異なっていた⁵⁸⁾。まず岡藩の武士住宅である。事例—44は100石台の中級武士の居住地に建つ武士住宅である。住宅の表は妻トコ座敷一次の間がヨコ型に配置され、その奥が家族の領域である。事例—45は100石取りの武士住宅であり、平面は次の間（トモマチ）が狭くなっているが式台玄関一次の間一座敷の構成は前事例と同じである。農家住宅との関連は座敷の位置において共通性があるが、平面全体の構成、次の間の性格、トコ形式などが異なっている。臼杵藩の武士住宅は事例—46～49にみるように平面構成が非常に多様であり、臼杵藩独自の平面形式はみられない。事例—46は100石台の中級武士の住宅であるが、座敷は正面玄関の反対側に位置する「対向型」である。次の間はなく、また接客領域と家族領域の明確な区分はみられない。事例—47にみる上層（300石台）の規模の大きい住宅になると、同じ「対向型」でも次の間があり、住宅の左側半分は家族領域、右側半分は接客領域に明瞭に区分された平面である。前2例と同じ街区に建つ150石の中級武士の住宅が事例—48である。座敷一次の間の位置は正面玄関側に設けられた前ヨコ型である。接客専用の玄関はなく通り土間だけである。さらに少規模になると、事例—49にみるように前座敷1室型の通り土間形式の住宅になる。臼杵藩の家作規制は江戸中期（元禄三年）から江戸後期（天保九年）まで25回も出されている⁵⁹⁾。とりわけ江戸後期の30数年間に13回も出され、それらはほとんど農家を対象としたも

三春藩武士住宅 (城下町) 住宅No.42
対向型 (江戸後期)
福島県三春町清水
(200石)

事例—40

住宅No.63 (江戸後期Ⅰ) 前座敷田の字型
岡藩 (大分県千歳村漆生) (平トコ型)
陸層 (本百姓)
岡藩・農家住宅

事例—41

住宅No.21 (江戸後期Ⅱ) 鍵座敷広間型
臼杵藩 (大分県臼杵市田中)
陸層 (本百姓)
臼杵藩・農家住宅

事例—42

住宅No.117 (江戸後期Ⅱ) 前座敷田の字型
佐伯藩 (大分県佐伯市尺間) (妻トコ型)
陸層 (小百姓)
佐伯藩・農家住宅

事例—43

岡藩武士住宅 (城下町) 住宅No.49
前ヨコ型 (江戸後期)
大分県竹田市竹田
(石高不明)

事例—44

岡藩武士住宅 (城下町) 住宅No.50
前ヨコ型 (江戸後期)
大分県竹田市竹田
(100石)

事例—45

臼杵藩武士住宅 (城下町) 住宅No.53
対向型 (江戸後期)
大分県臼杵市西海添
(100石)

事例—46

臼杵藩武士住宅 (城下町) 住宅No.55
対向型 (江戸後期)
大分県臼杵市西海添
(300石)

事例—47

臼杵藩武士住宅 (城下町) 住宅No.54
前ヨコ型 (江戸後期)
大分県臼杵市西海添
(150石)

事例—48

臼杵藩武士住宅 (城下町) 住宅No.58
前一室型 (江戸後期)
大分県臼杵市二王座
(石高不明)

事例—49

のである。天保八年の「家造の制」⁶⁰⁾をみると、家中に対しては、玄関口の戸の枚数、戸の幅、玄関と座敷の広さ等が階層ごとにきめ細かく決められているだけであるが、農家に対しての規制は、構造、屋根形式、天井、壁、台所、庇、各部屋の仕上げ、土蔵、納戸、雪隠等の詳細に渡る。このことも武士住宅の平面が多様であるのに対して、農家住宅がひとつの平面形式

に定形化している外的要因であろう。佐伯藩の給人（佐伯藩の中級武士の名称）の住宅が事例—50, 51である。2例とも平面はL字型に構成され、表側は接客空間の座敷一次の間がヨコに配置され、その奥は寝所、仏間、茶の間などの家族領域である。農家住宅とは妻トコの前座敷が一致しているだけでそれ以外関連性はない。

最後に中部の松本藩である。徳川譜代の水野氏（江戸初期）と松平氏（江戸中・後期）が統治している。松本藩の農家住宅は、領域の南端部に本棟造りの分布がみられるが、藩領全域的には概ね事例—52にみるような鍵座敷系住宅が支配的に分布している⁶¹⁾。武士住宅は事例—53の前座敷広間型と事例—54のタテ型座敷を持つ住宅の2つの型がある。大河直躬氏が調査した「松本市民家調査」の武士住宅をみると、調査住宅5戸のうちタテ型座敷を持つ住宅が2例、前座敷系住宅が3例ある。前者の2例は100石以上の中級武士の住宅であり、後者は1例が30石、他の2例は扶持取りの下級武士の住宅である。このことから松本藩でも上座敷—下座敷のタテ型座敷を有する住宅は、米沢藩と同じく中級武士の住宅形式であったといえる。この住宅と農家の鍵座敷系住宅とはタテ型座敷の面で共通しているが平面全体の関連性はない。また松本藩の武士住宅に本棟造りの特徴的な屋根と外観形式をもつ住宅がみられるが、その平面はタテ型座敷を有する住宅であり、本棟造りの平面とは大きく異なる⁶²⁾。さらに事例—54のように住宅の表側に立派な式台を持つ住宅も見られるが、これもタテ型座敷の下座敷に設けられたものであって本棟造りの平面形式ではない。したがって松本藩の南部に分布している本棟造りの農家住宅は松本藩の武士住宅との関連性はないといえる。

4. まとめ

① 武士住宅の規模と平面構成も農家住宅と同じく藩によって異なる。とりわけ自然・地理的条件が同質の地域内に隣接して位置する藩（上山—米沢藩、岡—臼杵—佐伯藩、松本—諏訪藩）においても、藩によって武士住宅の平面構成が異なっている事が注目されよう。また武士

事例—52

事例—53

事例—54

住宅の平面形式が一様化している藩と多様化している藩がある。これらの実態は、これまでにみてきた「藩による農家住宅の相違」と同様に藩の人的・文化的条件に規定された結果といえる。

② 在郷に武士が居住していた藩といない藩とでは、武士住宅と農家住宅の関連性は明

らかに異なる。在郷武士がいた藩では、武士住宅と農家住宅とは座敷構成を中心とした平面構成、屋根、外観などが同一傾向にある。とくに藩の在郷居住政策を基に在郷に武士がかなり多く居住していた藩では、城下町武士、在郷武士、農家住宅の3つの平面形式が同じであることが特筆される。さらに、平面構成だけでなくその発展過程も3者の住宅で同質的である。

これに対して在郷に武士が居住していない藩では、武士住宅と農家住宅との関連性は余りみられない。ただ、座敷などの住宅の部分的要素空間については、松本藩のように中級武士との類似性がみられる藩があるが、平面全体の構成については各藩とも類似性はみられない。

③ 一方、藩（大名）の性格からみると、近世以前からその領域の支配者であった旧族居付の大名の藩と、近世になって新しくその領地に入部（転封）した大名の藩とでは武士住宅と農家住宅との関連性が異なる。すなわち、前者の藩は関連性が強くみられ（旧族居付でも諏訪藩のように中途復帰し家臣の多くは他国出身の場合は若干傾向が異なる）、後者の藩では関連性はあまりない。しかし転封大名の藩でも、米沢藩のように積極的に武士の在郷居住政策を押し進めた藩では、武士住宅と農家住宅は非常に強い関連性がみられるのである。

④ 以上の事実からして、武士と農民は元々在郷に混在居住していたから、江戸初期の武士住宅と農家住宅はその初源においては軌を一にしても、その後の城下町武士の住宅においては、江戸中期ごろまでには接客空間を中心としたその藩独自の空間様式が発展成立し、その特徴的空間様式が江戸中・後期にかけて在郷武士住宅を媒体にして上層農家から本百姓農家に普及したと考えられよう。とくにその強い契機となったのは、江戸中後期にか

事例—50

事例—51

表一13 現存武士住宅の調査戸別概要

[illegible]

けて急速に進んだ城下町武士の在郷への土着化、帰農による移住であったと考えられる。

⑤ 藩の家作規制は規制項目と内容、対象とする階層、布告の頻度などにおいて藩によってかなり異なり、その藩で独自のである。江戸後期の農家住宅は本百姓以上の階層において、その規模、室内意匠などは規制の枠を越えている住宅が少なくない。しかしこの規制がその藩独自の平面構成成立の外的条件の1つになったことは確かである。これを人吉、米沢、相馬、臼杵、諏訪の各藩にみるのである。

謝 辭

本稿で対象とした11の藩の城下町と調査住宅が立地する現・市町村の教育委員会社会教育課、郷土資料館、図書館、郷土史研究者、調査住宅の方々には多大の協力を得た。また本稿の考察に既往の調査住宅資料を利用して頂いた。記して感謝します。最後に本稿は新住宅普及会の助成を受けたことを付記する。

注

- 1) ① (九州の岡, 臼杵, 佐伯藩について)

青木正夫，大岡敏昭：旧藩領域からみた江戸時代後期～明治期における農家住宅平面構成の地域的相違に関する実証的研究（その１），日本建築学会計画系論文報告集 363 号，昭和 61 年 5 月

②（東北の米沢，会津，山形諸，上山，信夫伊達，二本松，三春，相馬，磐城平藩について）

同：旧藩領域からみた江戸時代後期～明治期における農家住宅平面構成の地域的相違に関する実証的研究（その2），日本建築学会計画系論文報告集 369 号，昭和 61 年 11 月

③ (九州の延岡，椎葉，米良，人吉，鹿児島，熊本藩について)

同：旧藩領域からみた江戸時代後期～明治期における農家住宅平面構成の地域的相違に関する実証的研究（その3），日本建築学会計画系論文報告集 373 号，昭和 62 年 3 月

④ (東北の盛岡, 仙台藩について)

同：旧藩領域からみた江戸時代後期～明治期における農家住宅平面構成の地域的相違に関する実証的研究（その4），日本建築学会計画系論文報告集377号，昭和62年7月

⑤ (中部の松本、諏訪、甲府、上田藩について)

同：藩域からみた農家住宅の地域的特徴と歴史的発展過程に関する研究（Ⅱ），住宅建築研究所報12号

同：旧藩境界域からみた農家住宅の歴史的変容
過程に関する研究（その 23～25）日本建築学会
学術講演梗概集、昭和 60 年

⑥ (北陸、近畿の田辺、小浜、福井藩について)

同：旧藩境界域からみた農家住宅の歴史的変容過程に関する研究（その29～32）日本建築学会学術講演梗概集，昭和61年

- 2) 青木正夫, 大岡敏昭: 藩域からみた農家住宅の地域的特徴と歴史的発展過程に関する研究 (I), 住宅建築研究所報 11 号, また本稿の米沢藩の項でも明らかである。

- 3) 近年、史学の分野では江戸時代の総合的見直しが行われている。皇国史観の批判的検討である。農家の生活の発展と自立、村の自治もかなり存在したといわれる。

大石慎三郎編：江戸時代と近代化，筑摩書房

江戸時代のイメージ、歴史公論 1, 雄山閣など

- 4) 菅見談（寛政二年），吉田義信：置賜民衆生活史，図書刊行会，181 p 所収.

佐藤巧：盛岡藩遠野の侍住宅について，東北大学建築学
報 9, 10, 11 合併号

- 5) 登用郷士の定義は史学者によって若干異なるが、概ね農民、町人などの身分格上げした郷士格の階層で、研究者によっては金納郷士、献金郷士、百姓郷士などと称されている。

長井政太郎：上杉藩の郷土集落の研究，図書刊行会

岡光夫：郷土制に関する諸問題，同志社大学人文科学研究
所，昭和 39 年

- 6) 藩の在郷武士居住政策があったかどうかは、藩の種々の法令、記録文書などから判断した。

- 7) 佐藤巧：近世武士住宅，叢文社

大河直躬：江戸時代の中下級武士住居と近代都市住居，

(日本建築の特質、中公美術出版)

- 8) 佐藤巧：仙台藩における武士と農民の住居の間取りに就いて，建築学会研究報告 57。この論文によれば仙台藩の在郷武士と農民の居住は同じ間取りであることが分かる。
- 9) 武士住宅の階層構成は非常に複雑であり，藩によっても異なる。史学においても階層区分の定義ははっきりしていない。先学の武士住宅の論文においては，佐藤功氏は 300 石格以上を上級，100 石格以上を中級，50 石格または扶持取り層を下級に位置づけているようである（佐藤功：盛岡藩における上級武士の間取形式について，日本建築学会論文報告集第 57 号，同：近世武士住宅，葦文社 390 p～）。また大河直躬氏も，300 石以上の武士住宅を上級武士の居住とし，それ以下のものを中・下級武士の住居として区分している（大河直躬：江戸時代の中・下級武士住居と近代都市住居，日本建築の特質（中公美術出版）454 p。本稿ではそれらの先学の区分に準じて，300 石以上の武士を上級，50 石以上 300 石未満の武士を中級，50 石未満と扶持取りの武士を下級として区分している。藩の大小によって石高の割合も異なり，厳密には藩によって階層区分は異なっていくように標準的な区分といえよう。
- 10) 御家士とは藩の正式な家臣と農民を区分する呼称である。その階層は大きくは給人（50 石以上），徒士，小知徒士に分かれる。（多良木町史，296 p）
- 11) 人吉藩の登用郷士はかなり多い。江戸中期の宝暦・明和期には在郷の総軒数（御家士を除く）は 9633 軒である。そのうち一般農家（百姓，又百姓）は 5873 軒（61 %）であり，郷士は 2864 軒（30 %）も存在している。「宝暦・明和之際諸郷地蔵万納物寄」より 多良木町史に所収。
- 12) 熊本県史料集成第 14 集：人吉藩の政治と生活，日本談義社，180 p
- 13) 多良木町史，308 p
- 14) 熊本県立図書館に収蔵
- 15) 注 1 の③の文献
- 16) 前掲：人吉藩の政治と生活，日本談義社，185 p
- 17) 同前
- 18) 明和三年（1766）「上村爪尾村伝五出火覚」の中に以下の記録がある。上村史，409 p
 四疊敷四間 居間壱つ 但 石居
 五疊敷四間 台所壱つ 右 同断
 三疊敷三間 隠居所壱つ 右 同断 など
 これは，最初の疊敷は梁行き寸法で四疊敷とは 2 間を意味し，あとの間は桁行き寸法を表すものと思われる。この記載方法は人吉藩の多くの資料にみられる。
- 19) 藩政史研究会編：藩政成立史の総合研究－米沢藩，吉川弘文館
- 20) 米沢藩分限帳による，同前，369 p
- 21) 長井政太郎：上杉藩の郷士集落の研究，図書刊行会 16 p
- 22) 同前，2 p
- 23) 同前，23 p
- 24) 同前，4 p
- 25) 吉田義信：置賜民衆生活史，図書刊行会，181 p
- 26) 寛政四年（1792）と享和元年（1801）にだされている。
 高島町史，271 p
- 27) 高島町史，271 p に所収
- 28) 寛政七年（1795）には，侍組の糠野目御役屋第十二代将，大室主計が糠野目村に土着願いを出している。高島町史 273 p
- 29) 前掲：置賜民衆生活史，図書刊行会，48 p
- 30) 同前
- 31) 高島町史，765 p
- 32) 注 1 の②の文献
- 33) 前掲：上杉藩の郷士集落の研究，図書刊行会，15 p
- 34) 前掲：置賜民衆生活史，図書刊行会，194 p
- 35) 相馬市史，近世編，343 p，飯館村史，141 p
- 36) 飯館村史，142 p
- 37) 二宮尊徳の興国安民法であり，弘化二年から村単位で行い，全領の 226 ヶ村のうち 101 ヶ村で実施された。基本は日掛縄ない，営農資金の無利息貸与，善行者表彰，救民撫育，道路橋梁普請，家屋普請，連帯感の醸成など多岐に渡る。相馬市史，近世編，521 p
- 38) 相馬市史，近世編，477 p
- 39) 注 1 の②の文献
- 40) 相馬市史，近世編，479 p
- 41) 相馬市史，民俗編，48 p
- 42) 諏訪教育会編：諏訪の近世史，97 p～
- 43) 注 1 の⑤の文献
- 44) 前掲：藩域からみた農家住宅の地域的特徴と歴史的発展過程に関する研究（Ⅱ），住宅建築研究所報 12 号
- 45) 中トコとはトコ板の高さが二尺ほどあり，その下部は地袋である。武士住宅の主人の居間の簡易トコとして用いられている。
- 46) 注 1 の⑤の文献
- 47) 諏訪教育会編：諏訪の近世史，207 p
- 48) 同前，211 p
- 49) 東筑摩郡松本市塩尻市誌，第 2 巻，歴史下，117 p
- 50) 前掲：諏訪の近世史，291 p
- 51) 同前，786 p
- 52) 岩手県史，11 巻，189 p
- 53) 遠野南部氏の分知であって分藩ではない。岩手県史，11 巻
- 54) 注 1 の④の文献
- 55) 岩手県史，11 巻，527 p
- 56) 上山市史，中巻
- 57) 注 1 の②の文献
- 58) 注 1 の①の文献
- 59) 村瀬庄兵衛書き付け，臼杵市立図書館蔵
- 60) 前掲：藩域からみた農家住宅の地域的特徴と歴史的発展過程に関する研究（Ⅱ），住宅建築研究所報 12 号，臼杵藩の家作規制の内容はこれ以外には，板井精一著「臼杵藩の臼杵精神」（昭和十九年）に納められている。
- 61) 注 1 の⑤の文献
- 62) 東筑摩郡松本市塩尻市誌，第 2 巻歴史下，985 p

SYNOPSIS

UDC : 711.3 : 728.6 : 72.03 : 728.1

THE RELATION ON THE FARMHOUSE AND SAMURAIHOUSE BY A POSITION-TYPE OF A DWELLING IN SAMURAI

A study on the form factors of particular farmhouse
type in the fudal-clan by latter Edo period

by **TOSHIAKI OOKA**, Asst Prof. of Nihon Bunri Univ. and
Dr. **MASAO AOKI**, Prof. of Kyushu Univ. Members of
A.I.J

We examine, in relation to Samuraihouse and building regulations, why each feudal-Clan had a particular type of farmhouse We reached the following two conclusions from our survey

1) In the clans with many Samurai farmers, the farmhouse type is notably similar to house types either urban or rural samurai

2) Building regulations vary in their subjects, aims, Strictness, depending on the fudal-clans.

This is one of the factors that influences the particular farmhouse type and distribution patterns of types in each-clan